

[野菜部門 令和7年度 参考となる研究成果]

事項名	県内で初めて確認された <i>Burkholderia cepacia</i> によるネギ腐敗病の特徴		
ねらい	令和6年に県内のねぎで発生した褐変腐敗症状の病原を調査した結果、県内初確認となる <i>Burkholderia cepacia</i> による「ネギ腐敗病」であることが明らかになったので、その特徴を示し、診断と防除対策上の参考に供する。		
内容	<p>1 発生状況 発生地点：上北地域1地点1農家圃場 作型：露地栽培（令和6年4月中旬定植） 発生時期：令和6年8月下旬 品種：「夏扇パワー」 発生割合（出荷調製時）：2～10%</p> <p>2 病徴 葉身（緑色部）において外観症状がみられないが、上部を切断すると葉身内部に褐変腐敗が認められる（写真1）。この症状は、葉身が内側にくぼむ葉（ハート葉）に発生が多い傾向がある。発病が進むと、褐色～透明の水浸状腐敗は葉身、葉鞘から軟白部に進行し、重篤になると汁液が流れ出ることもある（参考）。<i>Pectobacterium carotovorum</i> による軟腐病とは異なり、悪臭を伴わない。</p> <p>3 病原菌 病斑部から分離した細菌について、ねぎへの接種（写真2）、細菌学的性状解析、種特異的検出PCRを行った結果、病原細菌 <i>Burkholderia cepacia</i> による「ネギ腐敗病」と同定された。<i>Burkholderia cepacia</i> はこれまでねぎのほか、たまねぎ及びシンビジウムで分離が報告されている。この菌は土壌伝染性の病原細菌であるため、被害植物残渣とともに土壌中に残り、寄主植物の栽培時に降雨による土壌の跳ね上がりによって、葉に感染すると考えられる。</p> <p>4 防除対策 (1) 連作を避ける。 (2) 圃場の排水を良好にする。 (3) 機械作業等による汚染土壌の移動を防ぐ。 (4) たまねぎではアザミウマ類の発生が、細菌性病害の発生を助長することが知られているため、アザミウマ類の防除を徹底する。</p> <p>5 出荷調製時の対策 葉身上部を切断した際、特にハート葉を有する株は注意深く観察し、葉身内部に褐変腐敗があった場合は廃棄する。</p>		
期待される効果	ネギ腐敗病の原因と特徴を明らかにすることにより、出荷時に腐敗株の混入を防止することができる。		
利用上の注意事項	ネギ腐敗病に対する登録農薬は令和6年12月20日現在ない。		
問合せ先（電話番号）	野菜研究所 病害虫管理部 (0176-53-7085)	対象地域 及び経営体	県下全域のねぎ 作付経営体
発表文献等	令和6年度 試験成績概要集（野菜研究所） 第78回北日本病害虫研究発表会		

【根拠となった主要な試験結果】

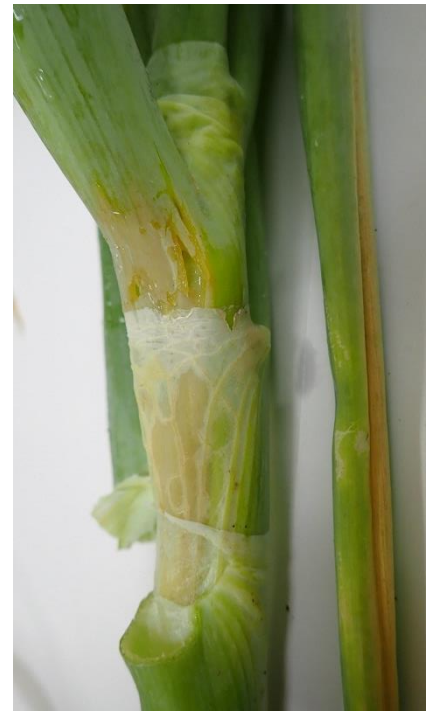


写真1 ネギ腐敗病の症状（左：ハート葉を分離、葉身基部の褐変腐敗、右：葉身内部の褐変腐敗、令和6年8月31日撮影）

（参考） ネギ腐敗病の症状（秋田県産、葉鞘の褐変腐敗）

（令和6年 青森野菜研）



写真2 接種によるねぎの症状（左：葉鞘の褐変腐敗、接種後28℃恒温条件にて12日目、令和6年10月21日撮影、右：葉身内部から葉鞘への褐変腐敗、接種後28℃～15℃変温条件にて13日目、令和6年11月12日撮影）

（令和6年 青森野菜研）